（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	小松原　哲太
論文題目	レトリックと意味の創造性―逸脱用法がもたらす表現効果の研究―		

（論文内容の要旨）

本論文は、認知言語学の立場から、修辞（レトリック）の表現がもたらす効果のメカニズムの解明を試みた理論的・実証的研究である。全体は６章から成る。

第２章は修辞に関する先行研究を概要し、本論文で適用する認知言語学の理論的観点と分析の方法論を示している。修辞を「コミュニケーション上の表現効果を目的とした表現方法の選択」と定義し、「修辞性」「修辞の動機づけ」「修辞的効果」に対する具体的な分析手法を提示することで、包括的な修辞の分析モデルを示している。第３章から第５章では、この手法を用いて、意味論・統語論・語用論に関わる具体的な修辞現象を分析する。

第３章では、連想の認知プロセスの点から、語の意味変化に関する二つの事例分析を行っている。第一の事例分析は、意味の近接性に動機づけられた修辞である「換喩」を扱い、その表現効果を「近視的イメージ」と「遠視的イメージ」に区分し、前者は話し手の局所化された知覚情報を写実的かつ詳細に描写する効果、後者はターゲットの特徴的な性質を言語化することで主観的な印象を描写する効果を産出することを示している。第二の事例分析では、形式の類似性に動機づけられた修辞である「言葉遊び」の記述と分析を行っている。特に Guiraud (1979) の《遊ぶもの》と《遊ばれるもの》の区分を用い、両者が一つの語句で表現され連想によって二重の意味をになう「兼用法」、両者が二度反復されることで詩的言語との共通性をもつ「反復法」、《遊ぶもの》が規範的な表現方法から逸脱し話者の修辞的意図を慣習的に含意する「もじり」に着目し、それらの動機について考察している。

第４章では、転移修飾の現象を中心に、統語関係の変容に関する二つの事例分析を行っている。第一の事例分析では、日本語の数量詞に転移修飾の現象が見られることを指摘し、その記述と分析を行っている。例えば「このチケットがたった一枚の希望だ」では、数量詞「一枚」は、統語上「希望」にかかっているようにみえるが、助数詞「枚」の意味的特性から、事実上は「チケット」を修飾するものと解釈される。この種の表現は、述定への転換が不可能である点、修飾部の位置を転移した言い換えが可能である点、さらに「チケットはたった一枚だ」の

ように言い換え表現では述定への転換が可能である点で、転移修飾に特徴的な振る舞いを示すことを指摘している。第二の事例分析では、日本語の名詞修飾表現「N_1のN_2」の反転現象に関する記述と分析を行っている。例えば「山山の初夏を見て来た自分の眼のせいかと、島村は疑ったほどだった」という例では、「初夏の山山」と「山山の初夏」はともに容認可能であるが、逸脱的な後者の語順が選択されることで修辞的効果が生じている。本論文では、修飾関係の反転が可能となるための条件、および反転による修辞性のメカニズムに関して記述と分析を行っている。

第５章では語用論の現象を取り扱い、特に陳述機能の修辞性に関わる二つの事例分析を行っている。第一の事例分析では、日本語の助動詞「ようだ」をモダリティ表現の機能転換の観点から検討し、直喩用法としての基本的特徴からの逸脱が「投影効果」と「不発効果」という修辞的効果を生むことを示している。前者は、「夢を見る細い魚のようにするりと彼女は出ていく」のように、比較される二つの存在に客観的な類似性がみられないにも関わらず比喩的解釈を喚起する効果であり、後者は、「まるでアメリカ人のような英語ですね」のように、反事実的なコンテクストで用いられる「ようだ」が事実的なコンテクストで用いられる際のユーモアの効果である。第二の事例分析では、発話行為の機能転換の観点から、日英語の発話行為の間接性を動機づける三つの認知的要因を示している。第一の要因は、発話行為に関するシナリオ的知識における認知的際立ちであり、「一人になりたい」という発話が「出て行ってほしい」よりも間接的で丁寧となるのは、シナリオ的知識においてより際立ちの低い要素である「一人になりたい」を参照点とした推論を必要とするためである。第二の要因は、ターゲットとなる発話行為が文字通りの発話行為と異なることの明示であり、例えば “You can take out the garbage.” は文字通りに陳述言明として解釈することができ、聞き手の読み込みがあって初めて依頼として機能する点で、“Can you take out the garbage?” よりも間接的である。第三の要因は、ターゲットとなる行為と言語化される行為の時間的順序であり、例えば “I suppose you had better talk to the housekeeper about a room for him.” という発話は、命令遂行により発生する聞き手の義務を陳述することにより、間接的な命令として機能する。

第6章では、第3章から第5章の事例分析を総括し、理論面と実証面からみた本論文のアプローチの意義と有効性を示すと共に、修辞研究の今後の展望について考察している。本論文の認知科学的アプローチにより分野横断的に修辞研究を推進する可能性を示唆し、本論文の結論としている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、認知言語学の理論を基盤とし、日常言語と文学的テクストにおける修辞（レトリック）のメカニズムの解明を試みた理論的・実証的研究である。修辞に関する研究は、アリストテレスの『弁論術』以降、極めて長い歴史を持つが、主に言葉の綾や文体的装飾に関わる問題とみなされ、言語学の中核からは離れた研究領域に位置づけられてきた。本論文は、修辞が意味論と語用論に関わる言語現象であると共に、文法とも多大な関連性を有することを示し、言語学における修辞の重要性を論証した論文である。また、修辞的効果の基盤となる認知的動機づけに着目し、多様な修辞現象の分析を通じ、言語と認知のメカニズムの解明を試みた注目すべき研究である。以下で、修辞研究、理論言語学研究としての本論文の意義を述べる。

まず修辞研究として、本論文は有意義な成果を示した労作である。膨大な先行研究および文献を丹念に読み込んだ上で、修辞に関わる言語的次元および機能を明確に整理し、茫漠とした修辞という現象に論理的な構成を与え、独自のモデル化を行っている点で高く評価される。本論文では、修辞にまつわる現象を「選択」「逸脱」「動機づけ」「効果」という四つの側面で分類し、さらに「修辞性」「修辞の動機づけ」「修辞的効果」という概念を規定することで独自の包括的なモデルを提示している。従来の修辞研究はこれらの四つの側面のいずれかのみに着目したものが多いが、この包括的モデルにより、意味論、統語論、語用論に関わる広範な事例の分析に成功している。さらに本論文のアプローチは、認知意味論で中心的に取り扱われている隠喩だけではなく、換喩や言葉遊びの現象も研究価値をもつ現象であることを、説得力ある議論によって示している。兼用法や反復法などの多様な修辞技法を射程に入れ、統一的観点から詳細な分類と記述を行っている点は注目に値する。

また、認知言語学に依拠し修辞効果を扱った体系的研究は、これまでの理論言語学にない新たな試みであると言える。本論文は、認知的解釈を反映した表現方法の選択として修辞を特徴づけており、認知科学の観点から修辞の動機づけを探求するものである。特に認知文法の理論を適用し、詳述性、焦点化、際立ちといった認知的要因を反映した事例を分析している。認知文法は通言語的な文法現象を統一的に説明するための一般言語理論であるが、本論文は、認知文法が修辞現象の分析に際しても有効であることを示している点で、理論的貢献をなしている。

さらに本論文は、言語学における伝統的な研究領域を横断する意欲的取り組みである。文法論・意味論・語用論で個別に記述されてきた言語現象を修辞という

観点から捉え直し、新たな研究の方向性を示している点も評価される。例えば、日本語学で相当数の記述がなされてきた助動詞「ようだ」を直喩と関連づけ、推量用法と直喩用法を比較し、認知的な観点から差異と共通性を分析することで、「ようだ」の意味的特徴を明らかにしている。また、初期の語用論において分析が進められた間接発話行為の問題を換喩の観点から捉え直し、発話行為に関わるシナリオ的知識に着目することにより、発話行為の間接性によってもたらされる修辞的効果のメカニズムを明らかにしている。このように本論文は、従来の文法論・意味論・語用論の住み分けによる限界を超越する、新たな言語学の可能性を示唆している。さらに、言葉の綾を収集することに重点をおく伝統的な修辞学において記述されてきた現象を言語学的に分析し、言語科学としての修辞研究を牽引する、重要な研究であると言える。

本論文は、コーパスや文学作品といった言語資料を丁寧に調査し、興味深い事例を収集し主張の例証に効果的に用いている点でも高く評価される。従来の言語研究に埋没してきた事実を発掘し、新たな研究意義を提示する観察眼の鋭敏さは特筆に値するものである。特に、これまで例外的現象であるとみなされてきた転移修飾が、数量詞や名詞による修飾表現に広く観察されるという指摘は極めて価値あるものである。修飾に関して文法研究でなされてきた前提や規則の一般化に再考を迫り、統語論をはじめとする文法研究において修辞の果たす役割を考慮に入れる必要性を示唆している点で重要な意義が認められる。

以上、本論文はレトリックの研究領域に固有の事実を記述し説明するモデルを構築するに留まらず、文法論や語用論等の分野での研究成果とも整合性をもち、相互にフィードバックが可能な方法によって記述を行っている。本申請者が所属する言語科学講座の目的の一つは、言語の構造、意味、運用、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、認知科学の学際的な研究プログラムにおける具体的な手がかりを提示するものとして評価することができ、今後の言語学と認知科学への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成２７年２月２日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公開可能日：　2015 年　3 月　24 日以降